

新着資料紹介

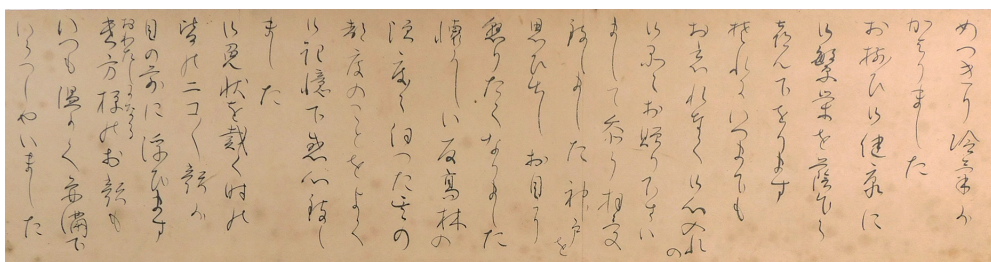
谷崎潤一郎夫人・松子からの書簡

史料館副館長 道 谷 卓

史料館は、二〇二四年（令和六）十二月に、文豪・谷崎潤一郎夫人の松子を書いた書簡の寄贈を受けた。谷崎松子を書いたこの書簡は、谷崎の代表作『細雪』にも登場する神戸の寿司職人・尾崎又二郎に宛てたものである。

額に表装されたこの書簡は、住吉川沿いの旧久原房之助邸跡に建つオーキッドコートにある「又平」という寿司店の座敷に飾られていた。この又平の初代当主が書簡を受け取った尾崎又二郎で、その孫の尾崎正佳・伸之兄弟から、この度、店を閉めることになったので、この書簡を多くの人に見てもらいたいと、史料館に寄贈していただいた（正佳氏が、私の中学校の同級生という縁で寄贈された）。

「又平」は、又二郎の時代には「与兵」と言う名前で生田神社の近くに店を構えていた。グルメだった谷崎は、住吉川沿いの「倚松庵」に住んでいた、一九三六年（昭和十一）から一九四三年ごろの間、この「与兵」にもよく通った。そこで、谷崎は、『細雪』の中巻・三〇章に「与兵」の一節を設け、頑固で気骨ある寿司職人としてこの店の主人を描いている。この『細雪』に出てくる寿司職人が、書簡の名宛人である尾崎又二郎そのものである。



松子夫人の書簡全文

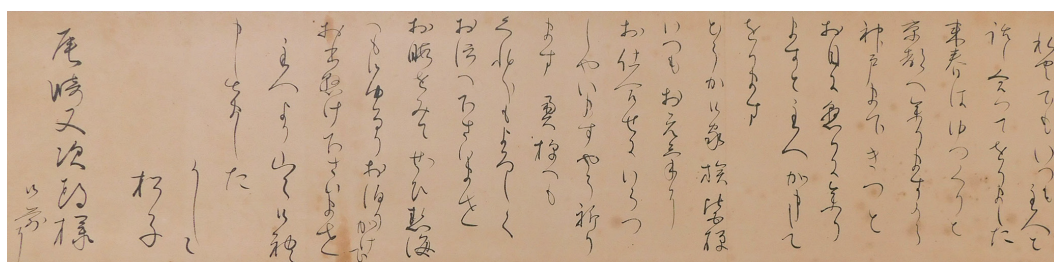
めつきり冷気か
かはりました
お揃ひ御健康に
御繁栄を蔭乍ら
喜んでをります
それにいつまでも
お忘れなく御心入れの
御品々お贈り下さい
まして忝う拝受
致しました、神戸を
思ひ出し、お目に
懸りたくなりました
懐かしい反高林の
頃、度々伺つた其の
都度のことをよく
御記憶で感心致し
ました
御免状を戴く時の
皆のニコ／＼顔が
目の前に浮びます
おわたしになる
貴方様のお顔も
いつも温かく円満で
いらつしやいました

この書簡はなぜ松子夫人から又二郎のもとに届いたのであるうか。戦後、谷崎夫妻は、神戸を離れ、静岡県の熱海に住んでいた。谷崎は、又二郎の握る寿司が忘れられなかったため、わざわざ、熱海まで又二郎を呼んで寿司を握ってもらっているのだ。一九六三年（昭和三十八）の夏、又二郎は息子の幸雄（私の同級生の父）を従え、寿司桶を担いで夜行列車に乗って熱海にある谷崎邸に駆け付けて、『細雪』に描写のある往年の寿司を谷崎のために握った。谷崎は、このことをとても喜んだ。

この手紙には、松子夫人はいつまでも忘れず贈り物を贈ってもらったことへのお礼をまず述べている。贈り物をもらい、倚松庵のある住吉の地名・反高林に住んでいた頃を思い出して懐かしいことや、来春には京都に行くので神戸まで足を延ばして会いに行きたいというようなことを書いている。「神戸を思ひ出し、お目に懸りたくなりました」と初めに書いているので、久しく出会っていない時期である。それでも贈り物を続けている。谷崎と又二郎の交流の深さが偲ばれる。

また、この額には、送られてきた封筒も添えられており、そこには、谷崎夫妻が住む「熱海市伊豆山」の住所、十一月二十四日という日付、「谷崎潤一郎 内」という文字が書かれている（表紙写真）。ちなみに、谷崎は「伊豆山」に一九五四年（昭和二十九）から住んでいる。

これまで店を訪れた人にしか知られていなかった谷崎潤一郎関連の資料を、この度、史料館で公開することになったので、多くの来館者にその実物を見てもらえることができれば幸いである。



私共でもいつも主人と話し合つてをりました
来春はゆつくりと
京都へ参りますから
神戸まできつと
お目に懸りに参り
ますと主人が申して
をります
どうか御家族皆様
いつもお元氣に
お仕合せにいらつ
しやいますやう祈り
ます、奥様へも
くれぐれもよろしく
お伝へ下さいませ
お暇をみてぜひ熱海
へもおゆるりお泊りかけ
て
お出懸け下さいませ
主人より山々お礼
申し出ました

尾崎又次郎様

御前に

かしこ
松子

（翻刻・大国正美）